テキストの内容を踏まえ自らの考えを表現する力の育成
―フィンランド・メソッドを援用した指導を通して―

長期研究員　高 橋　敏 哉

《研究の要旨》

自らの考えを表現する力の育成は，現行学習指導要領の課題の一つである。私自身も生徒と関わる中で，このような力の欠如を実感していた。加えて，今後実施される大学入試改革では小論文等が重視される見込みである。それゆえ本研究では，テキストの主題を踏まえつつ自己の価値観や人生観を基に社会的事象について思考・判断させる発問を通して，明確な理由や根拠をもって自分の考えを書いて表現できるようにすることをめざした。

Ⅰ　研究の趣旨

文部科学省は「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」で，現行学習指導要領の成果と課題を指摘している。同省はその中で，「多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること」を高等学校国語科の課題の一つとして挙げている。実際に自分の授業を振り返ってみると，テキストの読解を中心とする展開が多く，その内容を踏まえて自分の考えを形成させたり，それを表現させたりする機会を設けていなかったことが反省される。筋道立てて自分の考えを話せない生徒や，小論文を苦手とする生徒を目にすることが多いのは，このような授業に起因しているとも考えられるため，改善が急がれる。また，文部科学省の「高大接続システム改革会議『最終報告』」でも示唆されているように，今後実施される予定の「大学入学者選抜改革」によって，各大学の個別選抜では，小論文などの「自らの考えに基づき論を立てて記述させる」問題が増加する見込みである。そのような観点からも，同省が指摘する課題は看過できない。

以上のことから本研究テーマを設定した。なお，本研究では，総合的な言語能力の育成という観点から，書くことと読むことの関連を図るが，書くことに焦点を当てて表現活動を行う理由は，それによって思考のプロセスがより自覚的なものとなるため，論理的な思考力や表現力の更なる向上が期待できるからである。また，本研究で育成をめざす，教科書教材の文章である「テキスト」を読み，それを踏まえて自らの考えを表現していく力は，「ＰＩＳＡ型読解力」と同系統のものであると考えられる。そこで，「フィンランド・メソッド」を活用し，中でも「カルタ」「型」「相互評価」の三つを手だてとして取り上げる。

Ⅱ　研究の概要

１　研究仮説

国語科の授業において，以下の手だてを講じれば，テキストの内容を踏まえ，自らの考えを表現する力の育成ができるであろう。

【手だて１】テキストの内容を正確に理解させる授業の工夫
【手だて２】自らの考えを形成させるオープンエンドな発問の設定
【手だて３】表現内容を向上させるフィンランド・メソッド（「カルタ」「型」「相互評価」）を用いた指導

２　研究構想

(1)【手だて１】について

テキストから得た知識や思想及び，テキストからもたらされた感動などを通し，自分の考え方や感じ方をより深めたり広げたりしつつ，自分の生き方について考えるためには，読解段階において単に読んで理解するだけでなく，テキストの内容を要約したり再構成したりしながら，自分の知識や経験と関連付けて意味付けすることが大切である。この手だては，そのような主体的な読みにつなげるために，テキストを生徒自身に読解させ，理解を深めさせるものである。方法は，キーワードの整理や文章構造の把握を促すワークシートを活用させながらテキストの内容を自分で読んでまとめさせることと，読解問題（授業者が作成した内容理解に必要な記述問題）に取り組ませることを軸とする。また，読解のまとめとして百字要約を実施し，主題をとらえさせる。

(2)【手だて２】について

テキストの内容を社会生活と関連付けながら，自分の考えを形成させる手だてである。そのため，テキストの主題を踏まえつつ自己の価値観や人生観を基に社会的事象について思考・判断させる発問となるよう工夫する。また，客観的かつ論理的に思考・判断させるためにも，解答の条件等を明確化した発問とする。

(3)【手だて３】について

①　「カルタ」の活用

フィンランドの「カルタ」は「イメージマップ」とほぼ同義であり，創造的思考力の育成を目的としている。今回は，書く内容について発想を膨らませる手だてとなるよう，授業者が適宜変更を加えたものを活用する。

②　「型」の指導

書く内容の方向性を理解させるとともに，論理的思考力を働かせながら筋の通った文章を書かせる手だてである。そのため，何をどのように書いていけばよいか分か

るよう，発問に対する解答の「型」を示す。

③ 「相互評価」の実施

批判的思考力を働かせながら他者の文章を評価させる手だてである。この活動によって自分の文章の相対化を図らせ，後の推敲作業の質的向上につなげる。なお，主観的な評価とならないよう，活動に際しては授業者が評価規準を提示する。

(4) 単元の流れについて

テキストの読解の後にオープンエンドな発問を行い，発問に対する自分の考えを記述により合計３回解答させる。２回目の記述の前に「カルタ」の活用と「型」の指導を行い，３回目の記述の前に「相互評価」を実施する（**図１**）。

図１　単元の流れ

(5) 実証の方法について

授業中のオープンエンドな発問に対して記述させる３回分の内容を比較する。また，単元の初めと終わりにそれぞれ問題内容の異なるテストを行い，比較する。これらの問題内容は授業中の発問に準じたものとし，難易度は同等のものとする。さらに，単元の初めと終わりに意識調査を実施する。以上の方法で研究成果を検証する。

３　授業の実際

(1) 授業実践Ⅰの概要

小林隆の「日本語史の『当たり前』」を用いた２学年の現代文Ｂである。このテキストは，文献を見れば古典語のすべてが分かるという古典語研究者がとらわれがちな先入観について論じたものである。読解に３時間，表現に３時間，テストや意識調査を含め全７時間で実施した。

読解は，授業者がテキストの内容を大きく三つに分け，１時間に一つずつ読む形で進めた。１時間の授業は，ワークシートを活用させながら読解した内容を各自で整理させる前半と，読解問題に取り組ませる後半で構成した。授業者は，適宜全体指導を行った。発問については，テキストの内容を踏まえ，以下のように設定した。

> 社会（私たちの身の回り）にはどのような先入観があり，それがどのような問題を引き起こしているだろうか。例を一つ挙げ，それについてのあなたの考えを述べよ。

「カルタ」は，まず，「社会トピック一覧表」※1から言葉を自由に選ばせ，その言葉から連想できることを放射状に広げて書かせた。そして，その連想したことにまつわる先入観はないか考えさせた。「型」については以下のモデルを与えた。

> ①私たちは…という先入観にとらわれてしまいがちだ。
> ②しかし，このような先入観は…という問題を引き起こしてしまう（しまいがちだ）。
> ③それゆえ私は（このようなことについて私は），…と考える。（そのためにも，…。）

「相互評価」は３～５人単位の班を作らせ，互いの文章の長所と改善点を付箋紙に書かせる形で進めた。

※1　例えば「情報」の欄には「ＳＮＳ」「ＩＴ企業」等の言葉がある。

(2) 授業実践Ⅰの分析

意識調査の結果では，90%を超える生徒が【手だて１】によって読みが深まったことを実感しており，有効性が認められた。一方【手だて２】では，具体例が思いつかなければ何も書けないという課題が浮き彫りとなった。発問に対する記述を分析すると，「自分の考え」が０点であった生徒※2の割合は１回目が55%，２回目が38%，３回目が11%であった。授業前後のテストではともに約60%にまで上っており，「自らの考えを表現する力の育成」という目的が十分に達成できなかった。それゆえ，賛否を問う内容にするなど，「自分の考え」をもちやすくする発問の工夫が必要であると感じた。

【手だて３】については，授業前テストと比べて授業後テストの平均点が上昇しなかったことに注目すると，十分に機能していなかった可能性が考えられた（**図２**）。まず，「カルタ」であるが，授業後テストにおいて使用した生徒は全体の20%しかいなかった。これは，本実践で用いた「カルタ」が複雑で使いにくかったためだと考えられた。そこで，実践Ⅱでは，単純で活用しやすい形に改善することとした。また，「型」については，言葉を当てはめながら文章を完成させることはおおむねできていたが，筋の通った文章を書くことにまでは意識が及んでいない生徒が多かった。「相互評価」についても，相手の改善点を的確に指摘できない生徒が多かった。このような状況を考えると，適切な文章や評価とはどのようなものか，あらかじめ指導しておく必要性があった。

授業中の記述１回目（先入観について）	**4. 42点**／９点
授業中の記述２回目（先入観について）	**5. 61点**／９点
授業中の記述３回目（先入観について）	**6. 85点**／９点
授業前テスト（支配的な価値観について）	**3. 88点**／９点
授業後テスト（自然科学の欠点について）	**3. 56点**／９点

図２　実践Ⅰにおける記述の平均点

※2　授業前後のテストも含めた全５回の記述は，具体例３点，問題点３点，自分の考え３点の合計９点で授業者が採点した。なお，授業前テストは支配的な価値観について，授業後テストは自然科学の欠点について考えさせる問いとした。

(3) 授業実践Ⅱの概要

実践Ⅰに引き続き，清岡卓行の「手の変幻」を用いて授業を行った。このテキストは，ミロのビーナスの魅惑的な美しさは両腕を失ったからこそ生まれたものである，という主張が軸となっている。読解に３時間，表現に４時間，テストや意識調査を含め全８時間で実施した。

読解は実践Ⅰと同様に，三つの意味段落を１時間に一つずつ読み進めた。発問は逆説的なテキストの内容を踏まえて考えた。ただし，実践Ⅰの反省を受け，「自分の考え」をもちやすくするため賛否を尋ねる形とした。

> 「何事においても，『完全』（完璧）であることが必ずしも最良（善）とは限らない」という意見に対してあなたはどう考えるか。また，なぜそのように考えるのか。具体例を挙げながら説明せよ。

【手だて３】も，実践Ⅰの反省を基に改善した。「カルタ」は単純化し，「完全（完璧）」及び「不完全」というキーワードから連想できる言葉を放射状に広げて書かせた。また，「型」は，授業者が作成した非論理的な文章例を用い，論理的に書くとはどういうことか初めに指導した上で，以下の通り示した※3。

①私は何事においても「完全」（完璧）であることが必ずしも最良（善）とは限らないという意見に賛成／反対だ。
②なぜなら…だからだ。
③例えば…ということがあった。
④このような例を見ても…（＝②の内容）と言える。

「相互評価」も授業者が作成した例文で模擬評価を行わせ，評価方法を指導することから始めた。今回は，より的確な評価となるようルーブリック※4を示した。それを基にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｆの４段階で理由と具体例を評価させ，評価結果とコメントを付箋紙に書かせた。

※3　授業ではこの続きとして，⑤「これに対して…という人もいるだろう」，⑥「しかし，…だ」，⑦「それゆえ私は賛成／反対だ」という「型」も提示し，反対意見に対する反論を考えさせた。

※4　授業者もこれに沿って授業前後のテストも含めた全５回の記述を採点した。Ａは３点，Ｂは２点，Ｃは１点，Ｆは０点とし，理由と具体例で６点満点とした。なお，授業前テストでは競争社会の賛否を，授業後テストでは便利で豊かな社会の賛否を問うた。

(4) 授業実践Ⅱの分析

意識調査の結果では，前回と同様に90％を超える生徒が【手だて１】の効果を実感していた。また，定期考査の平均点（本単元に関わる問題のみ）を文系・理系ごとに見ると，本研究対象の４クラス中３クラスが実践を行っていないクラスよりも高かった。【手だて２】についても意識調査を見ると，発問に記述で答えることを通して自分の考えが表現できるようになったと感じている生徒は90％を超えていた。記述の内容を見ても，自分の考える理由とその根拠を書くことができなかった生徒（０点の生徒）の割合は，１回目が10％，２回目が２％，３回目が０％と，前回よりも大きく改善されていた。以上から，二つの手だては有効であったと考えられた。

【手だて３】については，授業中の３回の記述及び授業前後のテストの結果をそれぞれ比較すると，前者は回数を重ねるごとに，後者は後の方が高得点を取る生徒が増えていることから，有効性が認められた（**図３**）。

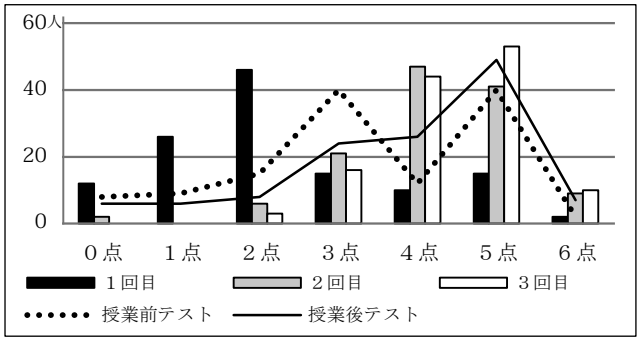

図３　実践Ⅱにおける記述の得点分布

一方で課題も見られた。意識調査では80％を超える生徒が，発想の手段として「カルタ」は有効であると回答していた。しかし，授業後テストで実際に「カルタ」を利用した生徒の割合は11％にとどまった。この結果から，「カルタ」の有効性を感じつつも，現段階では社会的な問題などの知識が乏しく，連想した言葉を社会的事象と結び付けられないために，使いこなせなかった生徒の実態がうかがえた。そのため，普段から新聞等に目を向けさせるなどの日常的指導も必要であると感じた。

また，２回目と３回目の記述結果を比較すると，**図３**のとおり全体的な得点は伸びたが，実際には，得点が上昇した生徒は21％にとどまった。逆に，変化がなかった生徒の割合は76％に上るため，「相互評価」が十分に機能しなかった可能性が考えられた。そこで，「相互評価」を行った各班から任意の１名（全クラスで32班あるため合計32名）を選び，その１名に対して他の班員２～４名（先の32名に対して合計88名）がどのように評価したか調べ，それを授業者の評価と比較した（**図４**）。ここに見られる「授業者より高い評価を下した生徒」の多さは，「型」に沿って書いた内容の妥当性や論理性について，改善点が分からない生徒の多さでもある。そのため，ルーブリックの改善はもとより，生徒の論理的思考力や批判的思考力を高めていくことが課題となった。

	理由	具体例
授業者より低い評価を下した生徒	12.5%	5％
授業者と同じ評価を下した生徒	50%	45%
授業者より高い評価を下した生徒	37.5%	50%

図４　実践Ⅱにおける，生徒と授業者の評価の比較

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果

テキストを生徒自身に読解させる【手だて１】によって，内容の理解を促進することができた。また，ワークシートや読解問題の活用は，短時間での読解をも可能とした。【手だて２】は，実践Ⅱで改善したことによって，テキストの内容を基に人間・社会・自然などについて自分の考えをもたせることができた。【手だて３】については，「型」を与えて書かせることによる効果が認められた。特に，書くことを苦手とする生徒にとっては，書くための極めて有効な手段となった。

２　今後の課題

【手だて３】の「カルタ」は，社会的事象に対する豊かな知識があって初めて活用できるものとなる。それゆえ，新聞等を活用させる学習を積極的に取り入れるなど，日常的に社会生活と向き合わせていくことが重要である。また，「型」や「相互評価」の更なる充実に向けては，論理的思考力及び批判的思考力の育成が必要である。そのためには，自分の文章をしっかりと練ったり，他者の文章をじっくりと吟味したりする「考える時間」の確保が欠かせない。それゆえ，単元構成の段階でそのような時間を十分に確保することはもちろん，３年間を通して継続的に実施していくことが肝要である。